巻頭特集

マスキングテープアーティスト

# 渡邊恭平

マスキングテープで描くドリームワールド

**渡邊恭平さんは、1枚の画用紙に、ひと色ひと色、マスキングテープを貼って絵を描く、松阪市在住の新進アーティスト。その絵を見た企業から声が掛かり、コラボレーション商品としてスマートフォンのケースにもなりました。今号では芸術の秋にふさわしく渡邊さんの作品や制作スタイル、個展や絵画教室を通じた市民交流の様子などを紹介します。**

渡邊恭平
わたなべ きょうへい
1981年生まれ 松阪市在住

松阪工業高校卒業後、名古屋の美術学校へ。卒業後は独学で墨や色鉛筆を使ったイラストを描いていたが、初の個展の準備中に出合った画材がマスキングテープ。個展が大反響を呼んで以来、マスキングテープアーティストとして注目の人。絵は購入ができ、ブログも好評。本誌の表紙は初めてハロウィンを題材にした作品。「牛のキャラクターも松阪牛にちなみ、初めて描きました」

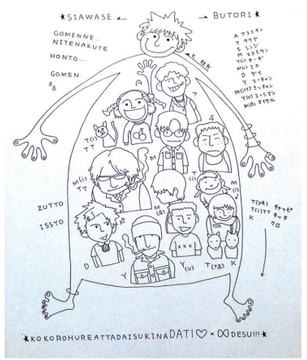
blog
http://ameblo.jp/1342hamuhei/
mail
utihazimu1122@i.softbank.jp

## 絵を描くことが大好きだった少年時代

「子どものときから絵が得意で、美術だけはいつも成績が良かったですね」と、ほほ笑みながら話す渡邊さん。将来の夢は漫画家で、見せてくれたノートやスケッチブックには、小中学時代に描きためたというオリジナルキャラクターがびっしりと描かれていました。ページをめくりながら、「この女の子のモデルは友達。その子を励ますそうと思って描いたキャラクターで、顔は全然似せていないのですが、彼女のかけていたメガネを誇張して描きました。その頃に描いたキャラクターがいまの作品に登場することもあります」と懐かしそうに語ります。

高校時代には文集に描いた絵がきっかけとなり、市内にあった百貨店の依頼でシャッターに絵を描くことに。シャッターは現存しませんが、当時の写真が残っていました。渡邊さんによれば、描いたのはシーラカンスに似た大きな「未来魚」。鮮やかな黄色の身体に赤い背ビレや尾ヒレ。背景色も青や紫でビビッドな配色が目に飛び込んできます。「ちょっと高台から見下ろすと松阪は夜景がきれいなんですよ。だから、地元・松阪の美しい夜景をテーマにしました。この未来魚自体が松阪の夜景」と話します。未来魚は愉快そうに笑いながら泳いでいるのですが、松阪の人々の未来への夢や希望を乗せて泳ぎ出したように見えます。

未来魚のように、絵に登場する女の子や空想の動物、モンスターなどのキャラクターが、みんな笑っていることも渡邊さんの作品の特徴。インパクトがある色使いとともに、絵の印象や渡邊さんの描く世界観を明るくしています。



上／高校生の時に描いた「友達で幸せ太り」している自分。観る人も幸せにする　下／かつて三交百貨店のシャッターに描かれたという「未来魚」。友人たちとともに一生懸命描いた

右／マスキングテープを重ねることで色の濃淡を出したり、立体的に見せたりしている　左／制作行程は、画用紙に鉛筆で下描きし、油性マジックでなぞる。その後、マスキングテープを貼り、切れ味を悪くしたカッターで下描きに沿って切ったあと、マジックの線をもう一度なぞって前に出し完成。横に貼ると重力ではがれやすいので縦に貼る。これも試行錯誤の成果

## 「うちはじむ」から動き出したいま

高校卒業後、渡邊さんは名古屋市内の美術学校へと進学しましたが、漫画家への夢は断念。ストーリーが全く浮かばなかったそうで、美術学校卒業後は「絵を仕事にするとおもしろくなくなる。絵を描くことも嫌いになるのでは」と、会社勤めや飲食店勤務などをしながら、趣味でイラストを描いていました。

そんな日々に転機が訪れたのは4年前。母親の知人がイラストを見て、その才能と作品に感銘し、個展開催を勧めたのです。しかしながら、「描きためた作品を展示するだけではつまらない。やるなら新しい作品で臨みたい」と渡邊さんは1年後の個展開催を決意。仕事を辞めて作品づくりに取り組んだのです。

新作を描くにあたり、なにか新しい画材はないものか、と探し回っていたある日、雑貨店でマスキングテープを見つけました。「色はもちろん太さや柄もいろいろで、単色で塗りつぶすよりもニュアンスが出る、はがして修正できることなど、マスキングテープの魅力や特性にすっかりとりつかれた」と渡邊さん。それからというもの、作品づくりに没頭。独自の制作過程、制作に使う道具選びなど、試行錯誤を繰り返しました。また、一度完成してから改めて見直し、全体の色の組み合わせがしっくりこないと全部はがして貼り直したこともあったと言います。↘

そうして迎えた1年後の平成22年5月、ついに初の個展「うちはじむ」を開催。「うちはじむ、という個展のテーマですが、漢字で書くと『打ち始む』です。強く始めようという自分の意気込みを掲げた」と話し、その眼差しからも当時の勢いや気合いを想像することができました。初の個展は3日間で300人が足を運び、大盛況のうちに終了。渡邊さんは「個展をやってみたら、なにかが動いた、始まったのだ、と実感できた。とにかくうれしかったし、やはり絵を描いて生きてこう、と思ったのです」と振り返ります。↖

名古屋のおしゃれなカフェで過ごす素敵な老人に出会い、描いた「隠れ家カフェ」

左／今年4月に行った渡邊さんと妻・由香里さんの結婚式のウエルカムボード。画材に初めてキラキラ光るシールを試したという1枚　右／鮮明な赤と少年の笑顔が印象的でスマートフォンケースに起用された「太陽を歩く」

個展を開催するたびに、ワークショップを開いてほしい、子どもたちに絵画を教えてほしいなどの依頼が飛び込むようになりました。そこで「MAPみえこどもの城」や、明和町の小学校などで、絵画を教え、子どもたちと一緒にマスキングテープで遊びながら「絵を描くことの楽しさ」を知ってもらうための活動を行っています。「子どもたちのリクエストに応えた下絵を描いてからテープを貼ってもらうのですが、テーマやテープの色選び、使い方の発想など、大人の僕には思いつかない発見が度々あります。だから、とても新鮮」と渡邊さん自身も楽しんでいる様子。「もっとまちの人々と交わっていきたい」と個展では絵の楽しさを伝えるために即興で来場者の似顔絵を描いているそうです。

「いつか松阪を街中で絵やアート作品が観賞できるようなアートのまちにしたい」と今後の夢を膨らませています。渡邊さんの描くポップなイマジネーションの世界が、松阪を心弾むまちに変えてくれるかも知れません。

文／いわもとのぶこ　写真／島田豊　デザイン／chica